〔原 著〕

対人関係の親密化過程における 関係性の初期分化現象に関する検討^{1) 2)}

山 中 一 英
名古屋大学

A study of early differentiation of relatedness in relationship development
among college students

KAZUhide YAMANAKA (*Nagoya University*)

The purpose of this study was to investigate early differentiation of relatedness in the development of interpersonal relationships among college students. Forty-three male and fifty-one female freshmen completed questionnaires regarding their relationship with a same-sex individual with whom they had just met. They were surveyed longitudinally at weeks 1, 2, 4, and 11 of their first term at the university. Major findings were as follows: (1) Ratings of relationship intimacy at week 2 predicted intimacy level at week 11, while ratings at week 1 did not. The results suggest early differentiation in relationship development. (2) Ratings of friendship intimacy at week 2 was correlated with dyadic behavior pattern, in which there were some interesting sex differences. With female subjects, friendship intimacy ratings were correlated with all dyadic behaviors for the past two weeks. On the contrary, with male subjects, ratings were highly correlated with companionship behavior while they were low with affection behavior for the past week.

Key words: intimacy, relationship development, friendship, longitudinal study, sex differences.

問 題

従来、対人間の表面的な接触によって形成される対人魅力の規定因について大きな関心が払われてきた。近年、この対人魅力研究の知見を基盤にして、現実の対人関係がどのような過程をへて親密な関係へと発展していくのかといった関係発展のプロセスに関する研究の必要性が

叫ばれている(中村, 1989; 和田・廣岡・林, 1986)。

対人関係の親密化過程に関する最も系統的で後の研究を刺激した理論に、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論 (Social penetration theory) がある。社会的浸透理論では以下のように仮定されている。

第1に、対人的交換は、内容の領域に関する「広さ (breadth)」と親密性のレベルに関する「深さ (depth)」

- 1) 本研究は、筆者の修士論文 (1992 年度, 名古屋大学) のデータの一部を再分析, 加筆修正したものである。また, 本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第 40 回大会で発表されている。
- 2) 本研究を御指導頂きました名古屋大学教育学部原岡一馬教授 (現久留米大学文学部教授), 村上 隆助教授に深く感謝いたします。また, 終始有益な助言を頂いた愛知淑徳大学文学部廣岡秀一助教授 (現三重大学教育学部助教授) に感謝いたします。

という2次元でおこなわれ、対人関係が進展するにつれ、狭い領域での表面的な相互作用から広い領域での親密な相互作用へと段階的にかつ系統的に進行していく。対人関係の親密化過程を、徐々に変化を示す段階的プロセスとしてとらえているのである。

第2に、こうした対人関係の進展は相互作用から予想される報酬とコストの量と質に大きく依存している。つまり、人は進行中の相互作用の報酬とコストのバランスを評価すると同時に、将来の相互作用から得られるであろう成果も予測する。そして、この評価と予測が好ましいものであれば、二者関係は引き続き親密なレベルへと移行する。要するに、現在の評価と将来の予測が繰り返され、それが好ましいものである限り関係は進展すると仮定するのである。

例えば、Taylor (1968) はお互いに未知の男子大学生のルームメイト同士を対象に13週間にわたる縦断的調査を行っている。その結果、時間が経過するにつれて自己開示は次第に増大していくことを示している。この他にも社会的浸透理論を支持する研究としては、Altman & Haythorn (1965), Ando (1978), Keiser & Altman (1976), Morton (1978), Taylor & Altman (1975), Taylor, Altman, & Sorrentino (1969) など多くの研究をあげることができる。

ところが、近年、社会的浸透理論に批判的な研究知見が提出されてきた。Berg & Clark (1986) は、“early decision-making (初期意思決定) and differentiation (分化)”という言葉を用い、ある対人関係の親密化可能性はその形成期において決定されると主張した。すなわち、ある関係の出会いからの極めて初期の対人的相互作用の様態が後続の相互作用の型を決定し、ひいては関係そのものの発展または崩壊の方向を運命づけてしまう(中村, 1991)というのである。彼らはこのような現象を、関係性の初期分化現象 (early differentiation of relatedness) と呼んでいる。

関係性の初期分化現象を支持した研究には、Berg (1984), Berg & McQuinn (1986), Hays (1984, 1985), 中村 (1989) などがある。

Berg (1984) は、UCLA の大学生を対象に、新学期の授業が始まって2週間後と4カ月後のその学期の終わりの2回、互いに未知であったルームメイト(同性)に、相手に対する好意度、満足度、類似性、衡平性、獲得した報酬、自己開示について評定させた。そして、現在のルームメイトと一緒に再び住みたいかどうかの決定を基準変数とした判別分析をおこない、この4カ月後の決定を予測しようとした。結果、その予測は最初の時点ですぐ

た測定値でさえ、4カ月後の測定値と同じくらい正確なものであった。なかでも、その関係に対する満足度が最も高い予測力を持っていることを見いだした。

本邦においても中村 (1989) が、大学生を対象に入学から約1カ月後と約5カ月後の2時点にわたって縦断的に調査を行った。その結果、出会いから1カ月程度経った時点において、すでに親密な関係と表面的関係との分化が始まっていることが認められた。

しかしながら、上述の関係性の初期分化現象を示した研究にも問題点があると考えられる。それは、先行研究において関係の“初期”として測定のなされた時期が、授業開始から2週間の時点 (Berg, 1984), 最近つきあい始めたばかりで5回ほどデートを行った時点 (Berg & McQuinn, 1986), 新学期開始から3週間経過した時点 (Hays, 1984, 1985), 入学から約1カ月の時点 (中村, 1989) であり、どの研究も出会いから1回目の測定までの期間が比較的長い。したがって、それまでの数週間でいつ分化が生じ、またいつその分化が安定したものとなるのかは依然として明らかとなっていない。

そこで本研究では、先行研究では検討されなかった出会いから極めて短い期間に焦点を当てる。そして、大学新入学生を対象に、入学式から1週間、2週間、4週間、約2カ月半経過した時点において、対人的相互作用の様態に関する縦断的データ(友人間で交わされる行動の質と頻度、及び関係の親密さ)を収集する。そして、関係親密度の時点間相関、及び関係親密度と友人関係行動との相関などの分析を通して、対人関係の親密化過程の検討を試みる。もし、約2カ月半後の関係親密度とごく初期のそれとの相関が高く、しかも時点を追っても相関の値がさほど変化しないのであれば、関係性の初期分化現象が生起していると考えられるであろう。これに対して、約2カ月半後の関係親密度とごく初期のそれとの相関が低く、それが時点を追うにつれて次第に上昇していくという結果を示すのであれば、社会的浸透理論に従っていると考えられるであろう。以上のように、縦断的データをもとに、対人関係の親密化過程が関係性の初期分化現象を示すのか、社会的浸透理論に従うのかを検討することが本研究の主たる目的である。

加えて、対人関係の親密化を規定する要因として、二者間で交わされる行動的側面を探索的に検討する。なぜなら、対人関係の親密化過程を解明しようとする研究は従来の対人魅力研究の知見を基盤としているが、対人魅力の規定因は主として認知的側面に偏りすぎており、現実の対人関係を考えると行動的側面にも焦点を当てるべきであると思われる。また、Hays (1984) も指摘している

ように、行動的側面に焦点を当てることは、従来の知見を統合しながら対人関係の親密化過程をとらえていく上で、きわめて有意義であると思われるからである。

さらに、様々な側面で同性友人関係には性差がみられる(和田, 1993)ことから、本研究においても性差について検討することにする。

方 法

友人関係行動チェックリスト構成の手続き(予備調査)

友人関係の行動的側面を検討するために、Hays (1984, 1985), 和田・廣岡・林 (1986), 中村 (1989) などを参考に、112項目からなる友人関係に関する行動チェックリストを作成した。さらに、社会的浸透理論の広さと深さの次元に沿うよう、以下の手順で項目を分類した。

広さ (breadth) の次元については、Hays (1984) に従い、対人的相互作用の内容に関して次の4つの領域を設定した。

Companionship：一緒に活動や経験を共有する。一緒に何かを行い、お互いの交際を共有する。

Communication：(言語的あるいは非言語的に) 自分自身に関する情報を開示したり、話し合ったりする。

Consideration：‘helper’としての友人の役割を果たす。

つまり、物・サービス・サポートを提供する。

Affection：他者に対して感じたいかなるセンチメント(ポジティブであろうとネガティブであろうと)をも表す、パートナーとの間の情動的絆を表す。

5人の大学院生に112項目の行動リストをこれら4つの領域に分類させ、5人のうち3人以上が割り当てた領域に各項目を分類した。その結果、Companionshipに38項目、Communicationに27項目、Considerationに23項目、Affectionに17項目が分類された。ただし、7項目がいずれの領域にも分類されなかったため除外された。平均一致率は78.1% (SD=10.71) であった。

深さ (depth) の次元については、本調査とは別の被調査者を用いた予備調査を行い、4つの広さの次元ごとに各項目を4つの親密性レベルに分類した。

予備調査は、国立N大学教養部、私立A短期大学、私立N短期大学の学生、男性128名、女性113名、計241名を対象に実施した。まず、被調査者に自分の友人の中から、「顔や名前を知っている程度の同性の友だち」(親密性レベル1)「会えば話をする程度の同性の友だち」(親密性レベル2)「ある程度親しい同性の友だち」(親密性レベル3)「最も親しい同性の友だち」(親密性レベル4)という4つのレベルに相当する友人を想起させた。そして、想起させた友人と、これまでに行動チェックリスト

Table 1

友人関係行動チェックリスト項目の例

深 さ (親密性の レベル)	広 さ (内容の領域)			
	Companionship	Communication	Consideration	Affection
レベル 1	O と私は、一緒に昼食をとった。 (18 項目)	O と私は、新聞やテレビで報道された出来事について話した。 (12 項目)	私は、O の頼み事を引き受けた。 (3 項目)	私は、O のしたことを賞賛した。 (4 項目)
レベル 2	O と私は、一緒にスポーツをした。 (4 項目)	私は、私の将来の夢について O に話した。 (4 項目)	私は、O からお金や物 (CD・本等) を借りた。 (6 項目)	
レベル 3	O と私は、ドライブや日帰り旅行に出かけた。 (9 項目)	私は、自分の異性関係を詳しく O に話した。 (9 項目)	私は、O が学校で問題を解決するのを助けた。 (8 項目)	私は、特別な用事もないのに、O に電話した。 (9 項目)
レベル 4	私は、O の家に泊まった。 (5 項目)	O は私に、O の個人的な手紙を読ませてくれた。 (2 項目)	私は、O を自宅まで送ってあげた。 (5 項目)	私は、O の前で涙を流して泣いた。 (4 項目)

Note. () 内は、各カテゴリーに割り当てられた項目数である。15 カテゴリーの合計が112にならないのは、広さの次元、深さの次元の分類において分類されなかった項目があるからである。

にある行動を行ったことがあるかどうかを2段階でチェックさせた。そして、各項目の経験率を、親密性レベル1、親密性レベル2、親密性レベル3、親密性レベル4、という4つのレベルの順に並べたとき、最初に20%を超えた親密性レベルをその項目の親密性レベルであると考えた。例えば、「Oと私は、一緒にスポーツをした」という行動項目は、「顔や名前を知っている程度の同性の友だち」とは、全被調査者の14.47%がこれまでに行ったことがあると回答し、以下同様に「会えば話をする程度の同性の友だち」とは36.88%、「ある程度親しい同性の友だち」とは55.63%、「最も親しい同性の友だち」とは78.62%の経験率であった。したがって、この行動項目の親密性レベルは「2」となる。ただし、Affection-intimacy level2には1項目しか分類されなかったため、level2とlevel3をひとつにしてAffection-intimacy level3とした。また、3項目がいずれの親密性レベルにも分類されなかったため除外された。分類された友人関係行動チェックリスト項目の例をTable1に記す。

被調査者

国立N大学において心理学を受講する1年生。1回目の調査には242名（男性128名、女性114名）、2回目には230名（男性120名、女性110名）、3回目には215名（男性110名、女性105名）、4回目には191名（男性93名、女性98名）が回答した。そして、153名（男性74名、女性79名）が4回の調査すべてに回答した。ただし、本研究では、4回の調査において、想起した対象人物として記入させたイニシャルが4回とも全く同一であった被調査者のみを有効被調査者として分析対象とした。有効被調査者は94名（男性43名、女性51名）であった。有効被調査者数が減少した主な理由としては、時点を追うに従って授業への出席者が減少したことに加えて、調査時点によって被調査者の書いた対象人物のイニシャルの姓名の順番が逆転していたり、どちらか一方しか書いていなかったりなどで、イニシャルが4回とも全く同一にならなかった場合があるからである。

調査実施時期

1回目の調査は入学式の1週間後の1992年4月15日（授業開始日）、2回目は入学式の2週間後の4月22日、3回目は入学式の4週間後の5月6日、4回目は入学式の約2カ月半後の6月24日に実施された。調査はすべて同一の心理学講義の時間に実施された。

手続き及び質問紙の構成

“大学入学前はお互いに見ず知らずで、入学後知り合い、時間が経つにつれて、良い友人になりそうだと思う同性の人物を頭に思い浮かべてください”という教示の

もとに（1回目のみ）、対象人物を想起させた。さらに、質問紙にその人物のイニシャルを書かせた上で、以下に示す尺度項目に回答させた。

(1) 友人間で交わされる行動

チェックリスト項目を被調査者に提示し、調査時点までの1週間（3回目のみ2週間であるがそのうち1週間はゴールデンウィークであり1週間の間隔と大差ないものと考えられる）に対象人物と行ったすべての行動の有無を2段階でチェックさせた。

(2) 関係の親密さ

好意度

“現時点で、あなたは対象人物に対してどの程度好感を持てますか”について、「まったく好感が持てない＝1点」から「非常に好感が持てる＝7点」までの7段階で評定させた。

関係関与度

“現時点で、あなたは対象人物と、どの程度深く関わっていると思いますか”について、「非常に浅く関わっている＝1点」から「非常に深く関わっている＝7点」までの7段階で評定させた。

関係のラベリング

“現時点で、あなたは対象人物と、どの程度親しいですか”について7段階で評定させた。なお、評定尺度上には「顔や名前を知っている程度の友人＝1点」「会えば話をする程度の友人＝3点」「ある程度親しい友人＝5点」「最も親しい友人＝7点」といった関係のラベルが示されていた。2、4、6点には何も示されていない。

結 果

1. 約2カ月半後の関係の予測

本研究においては、二者関係の親密さの基準として、好意度、関係関与度、関係のラベリングの3項目の平均評定値をもって関係親密度得点とした。

Table2
関係親密度の時点間相関（男性 \ 女性）

	1回目	2回目	3回目	4回目
1回目		.677***	.627***	.484***
2回目	.581***		.882***	.736***
3回目	.467**	.903***		.865***
4回目	.266 ⁺	.659***	.687***	

Note. 男性：N = 43 女性：N = 51

有意水準：+p < .10, **p < .01, ***p < .001.

1.1 関係親密度の時点間相関

関係親密度の安定性を吟味するために、関係親密度の時点間相関を算出した (Table 2)。近接した時点相互の間では相関は高く、時点間隔が開くにしたがって安定性が低下する傾向が全般的に認められる。1回目と4回目の相関係数と2回目と4回目の相関係数とを比較すると、このような全般的傾向以上の大きな差異がある。つまり、1回目では関係親密度が比較的不安定であり、2回目以降安定する傾向がうかがえる。

1.2 出会って1週間後の関係親密度による予測

次に、1回目 (出会って1週間後) の調査時点で、将来の関係の親密さを予測できる関係の分化が生起しているかどうかを検討する。1回目の調査における関係親密度得点の中央値 (5点) を基準として、中央値以上を親密関係群、中央値未満を表面的関係群として設定し分析をすすめた。各群の被調査者数は、親密関係・女性群 35名、親密関係・男性群 20名、表面的関係・女性群 16名、表面的関係・男性群 23名である。しかし、若干欠損値のあるデータがあるので従属変数によっては各群の被調査者数が異なる場合がある。なお、1回目の調査における関係親密度得点の α 係数は、.79 であり、内的一貫性は高いと考えられる。

関係親密度

1回目の関係 (2) $\times$ 性 (2) の分散分析を4回目の関係親密度得点を従属変数として行った。その結果、1回目の関係の主効果が4回目においても有意であった ($F(1, 90) = 8.81, p < .01$)。また、1回目の関係 (2) $\times$ 性 (2) $\times$ 時点 (4) の分散分析を1回目から4回目までの関係親密度得点を従属変数として行ったところ、1回目の関係の主効果が有意 ($F(1, 90) = 35.12, p < .001$)、性の主効果が有意傾向 ($F(1, 90) = 3.74, p < .06$)、1回目の関係 $\times$ 時点の交互作用 ($F(3, 270) = 4.82, p < .01$) が有意、1回目の関係 $\times$ 性 $\times$ 時点の交互作用 ($F(3, 270) = 2.51, p < .06$)

Fig. 1. 関係親密度の時系列的変化 (1回目の関係親密度で群分け)。

の有意傾向が示された。関係親密度得点の時系列的変化を Fig. 1 に示す。4回目においても1回目の関係の主効果が認められたことから、出会って1週間の時点での関係親密度が約2カ月半後まで持続していたことが示された。また、1回目の関係 $\times$ 性 $\times$ 時点の交互作用が有意傾向を示したことから、関係親密度得点の時系列的変化が1回目の関係と性によって異なる可能性が示唆された。この点に関しては考察で詳細に記すことにする。

友人関係行動

広さの次元の各領域ごとに親密性のレベルに応じて出現頻度に重みづけを与え、それぞれの領域得点を算出した。具体的には、親密性レベル1の出現項目には1点、レベル2の出現項目には2点、レベル3の出現項目には3点、レベル4の出現項目には4点を与え、その合計を行動領域得点とした。なお、この得点は各レベル内の項目数で除してある。

1回目の関係親密度得点に基づいた親密関係群、表面的関係群の、4つの各行動領域得点の時系列的変化を Fig. 2 ~ Fig. 5 に示す。Fig. 5 は比較的安定していると考えられるが、Fig. 2 ~ Fig. 4 はグラフの形状が極めて不安定であることがわかる。

Fig. 2. Companionship 得点の時系列的変化 (1回目の関係親密度で群分け)。

Fig. 3. Communication 得点の時系列的変化 (1回目の関係親密度で群分け)。

Fig. 4. Consideration 得点の時系列的変化 (1 回目の関係親密度で群分け)。

Fig. 5. Affection 得点の時系列的変化 (1 回目の関係親密度で群分け)。

そこで、1 回目の関係 (2) × 性 (2) の分散分析を 4 回目のそれぞれの行動領域得点を従属変数として行った。その結果、Affection 得点でのみ 1 回目の関係の主効果が有意であった ($F(1, 88) = 4.13, p < .05$)。つまり、出会って 1 週間の時点での関係親密度が、約 2 カ月半後の対象人物との情緒的絆を表す行動を予測できることが示された。

1.3 出会って 2 週間後の関係親密度による予測

さらに、2 回目 (出会って 2 週間後) の調査時点で将来の関係の親密さを予測できる関係の分化が生起しているかどうかを検討する。

1 回目の場合と同様に、2 回目の調査における関係親密度得点の中央値 (5.33 点) を基準として、中央値以上を親密関係群、中央値未満を表面的関係群として設定し分析をすすめた。各群の被調査者数は、親密関係・女性群 35 名、親密関係・男性群 14 名、表面的関係・女性群 16 名、表面的関係・男性群 29 名であった。しかし、若干欠損値のあるデータがあるので、従属変数においては被調査者数の異なる場合がある。なお、2 回目の調査における関係親密度得点の α 係数は、.84 であり、内的一貫性は高いと考えられる。

Fig. 6. 関係親密度の時系列的変化 (2 回目の関係親密度で群分け)。

関係親密度

4 回目における関係親密度得点を従属変数として 2 回目の関係 (2) × 性 (2) の分散分析を行った。その結果、4 回目においても 2 回目の関係の主効果が有意であった ($F(1, 90) = 54.27, p < .001$)。また、2 回目の関係 (2) × 性 (2) × 時点 (3) の分散分析を、2 回目から 4 回目までの関係親密度得点について行ったところ、2 回目の関係の主効果のみが有意であった ($F(1, 90) = 118.48, p < .001$)。関係親密度得点の時系列的変化を Fig. 6 に示す。出会って 2 週間の時点での関係親密度の分化が約 2 カ月半後まで持続していたことが示された。

友人関係行動

2 回目の関係親密度得点に基づいた親密関係群、表面的関係群の、4 つの各行動領域得点の時系列的変化を Fig. 7 ~ Fig. 10 に示す。Fig. 7 ~ Fig. 10 において明らかなように、親密関係群と表面的関係群とが極めて明確に分化していることがわかる。

そこで、2 回目の関係 (2) × 性 (2) の分散分析を 4 回目の各行動領域得点を従属変数として行った。その結果、すべての領域において 2 回目の関係の主効果が有意であった (Companionship (Fig. 7) : $F(1, 88) = 9.07, p < .01$; Communication (Fig. 8) : $F(1, 87) = 10.72, p < .01$; Consideration (Fig. 9) : $F(1, 87) = 8.00, p < .01$; Affection (Fig. 10) : $F(1, 88) = 8.03, p < .01$)。すなわち、出会って 2 週間後の関係親密度が約 2 カ月半後の行動を予測できることが示された。

以上の結果から、出会って 2 週間ですでに約 2 カ月半後の関係の親密さを予測できる関係の分化が生起しているということが示された。

2. 対人関係の親密化のための行動、及びその性差

前述したように、将来関係が親密になるか否かは出会って 2 週間で決定されることが明らかとなった。ここでは、2 回目の関係親密度と各行動領域得点との相関から、対

山中：対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討

Fig. 7. Companionship 得点の時系列的変化（2回目の関係親密度で群分け）。

Fig. 8. Communication 得点の時系列的変化（2回目の関係親密度で群分け）。

Table 3

2回目の関係親密度と1回目の各行動領域得点との相関

	COMPANIONSHIP	COMMUNICATION	CONSIDERATION	AFFECTION
女性	.382** (51)	.310* (51)	.404** (51)	.277+ (50)
男性	.307* (43)	.234 (42)	.131 (41)	.251 (42)

Note. () 内は計算に用いられた人数。

有意水準：+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

人関係を親密にするための行動について探索的に検討する。また、性差に関して併せて検討する。

まず、2回目の関係親密度と関連があるのは、出会ってから2週間の相互作用なのだろうか。それとも出会ってから1から2週目の1週間³⁾の相互作用なのであろうか。この点を検討するために、2回目の関係親密度得点と1回目の各行動領域得点との相関係数（Table 3）、及び2回目の関係親密度得点と2回目の各行動領域得点との相関係数（Table 4）を算出した。

Table 3から明らかなように、女性の場合、Affection

Fig. 9. Consideration 得点の時系列的変化（2回目の関係親密度で群分け）。

Fig. 10. Affection 得点の時系列的変化（2回目の関係親密度で群分け）。

Table 4

2回目の関係親密度と2回目の各行動領域得点との相関

	COMPANIONSHIP	COMMUNICATION	CONSIDERATION	AFFECTION
女性	.480*** (51)	.326* (50)	.456*** (51)	.423** (51)
男性	.628*** (42)	.497*** (43)	.517*** (43)	.234 (43)

Note. () 内は計算に用いられた人数。

有意水準：* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

は有意傾向にとどまっているものの、それ以外の1回目のすべての行動領域得点が2回目の関係親密度と有意な相関を示している。これに対して、男性の場合、2回目の関係親密度と有意な相関を示しているのはCompanionshipのみである。また、Table 4から明らかなように、男性のAffection以外のすべての2回目の行動領域得点が2回目の関係親密度得点と有意な相関を示している。

要するに、出会ってから2週間で将来の関係の親密さを予測できるのであるが、出会いから1週間の相互作用は、男性よりも女性にとってより重要であることを示し

3) 本研究では、出会ってから1週間目より2週間目までを、“出会ってから1から2週目の1週間”と表現する。

ていると考えられる。

次に、2回目の関係親密度と関連をもっているのはどのような行動領域なのであろうか。女性の場合、出会ってから2週間の相互作用が重要であるため、Table 3, Table 4を見ると、1回目のAffectionとの相関は有意傾向にとどまっているが、それ以外はCommunicationとの相関が若干低いもののどの行動領域得点も関係親密度とほぼ同じような相関を示している。これに対し男性の場合、出会ってから1から2週目の1週間の相互作用が重要であるため、Table 4を見ると、女性に比べて行動領域間の差が大きい。すなわち、Companionship得点との相関が比較的高く、Affection得点との相関が低いことがわかる。

以上をまとめると、将来関係が親密になるか否かは出会って2週間で決定される。そして、そこには性差が存在する。すなわち、女性の場合、それまでの2週間のうちにあらゆる領域の行動を対象人物と行うことが対人関係を親密にさせるために重要となる。対照的に男性の場合、出会ってから1から2週目の1週間が大切であり、その1週間で、Companionship得点に反映されるような一緒に活動や経験を共有することがより重要となることが示された。

考 察

1. 対人関係の親密化過程に関する理論的考察

まず、関係親密度得点の時点間相関を示したTable 2によると、全般的に有意な相関を示しているものの、1回目と4回目の相関は、2回目と4回目、3回目と4回目との相関と比較して、その値はかなり低い。この結果は、関係の親密さが1週間では不安定で2週間経つと安定してくることを示すものであると考えられる。

そこで、1回目の関係×性の分散分析を行った結果、4回目において1回目の関係の主効果が有意であったことから、出会って1週間の時点での関係の分化が約2カ月半後まで持続していることが示された。しかし、1回目の関係×性×時点の分散分析を行ったところ、1回目の関係×性×時点の交互作用の有意傾向が示された。Fig. 1において明らかなように、女性の場合は1回目の時点での関係の分化が4回目まで比較的安定している。しかし、男性の場合、1回目で親密でないかと評定したものは時点を追うにしたがって関係親密度がほとんど変化なしに若干上昇し、1回目で関係が親密だと評定したものは時点を追うにしたがって関係親密度が下降していく傾向がうかがえる。要するに、女性の場合は1回目の時点ですでに

比較的安定して将来の関係の分化を表していると考えられるのに対して、男性の場合1回目の時点での関係の分化はまだ不安定な分化であると考えられる。なぜこのような性差が生じるのであろうか。和田・廣岡・林(1986)、及び和田(1993)によれば、女性は友人関係に情動的色彩が強いという。また、廣岡(1985)は、状況認知において男性に比べて女性は不安次元に大きなウェイトを置いていることを示している。また、一般的に女性の方が不安傾向が高い(Mendelsohn & Griswold, 1967; Templer et al., 1971など)。さらに、不安になると親和性が高まる(Schachter, 1959)ことが知られている。したがって、入学して間もない時期においては、男性に比べて女性の方が不安が高いであろう。ゆえに、女性は1回目の時点から親密性を表出しているのだらう。その結果、男性に比べ女性は、1回目の時点から関係が安定して分化するのではないかと考えられる。

さらに、2回目の関係×性の分散分析を4回目の関係親密度得点について行った。その結果、2回目の関係の主効果が4回目においても有意であった。また2回目の関係×性×時点の分散分析を行ったところ、2回目の関係の主効果のみが有意であった。すなわち、Fig. 6において明らかなように、2回目の時点でなされた関係の分化は4回目までまったく安定している。1回目の時点での分化は不安定なものであった男性においても極めて安定していることがわかる。

次に友人関係行動の結果について考察する。1回目の関係×性の分散分析を4回目の各行動領域得点を従属変数として行った。その結果、Affectionにおいてのみ1回目の関係の主効果が有意であった。すなわち、出会って1週間の時点での関係親密度が、約2カ月半後の対象人物との情緒的絆を表す行動を予測できるということである。

さらに、2回目の関係×性の分散分析を4回目の各行動領域得点を従属変数として行った。その結果、すべての得点において2回目の関係の主効果が有意であった。すなわち、2週間の時点では2カ月半後の関係の分化が明確になされていることを意味している。

本研究の結果からは、少なくとも約2カ月半後の関係の親密さのレベルは、出会ってから2週間で決定される可能性が示唆された。Bergのいう(Berg & Clark, 1986)初期意思決定(early decision-making)が、出会って2週間でなされることが明らかとなった。

では、なぜ1週間の時点では不安定で、2週間経つと安定するのであろうか。考えられるひとつの理由は、対象人物との関係を親密なものとするか否かの「意思決定」をするための期間が、1週間では不十分であり2週間経

つと十分になるということである。ただし、2週間という時間が必要なのか、2週間でなされる相互作用が重要なのかは本研究からは明らかにすることができない。今後の検討課題である。また、1回目の関係親密度評定が真に関係の親密度を測定しているのではなく、その他の要因が混合している可能性も考えられる。例えば、社会的交友性などのパーソナリティ要因が混在しており、1回目の関係親密度評定で親密であると回答した人は社会的な交友性を持っていたため高く評定したとも考えられる。

社会的浸透理論が関係性の初期分化現象かという問いに対しては以下のような結論が導き出されよう。対人関係の親密化過程が社会的浸透理論に従うとするならば、親密な関係とそうでない関係の分化がもっと段階的になされていかなければならない。しかし本研究において、将来の関係の性質（親密か表面的か）に関する分化が会ってわずか2週間でなされ、その分化がずっと維持されていくことが明らかとなった。この意味において、時間経過に伴い関係の性質が分化していくというのではなく、対人関係の親密化過程は、関係性の初期分化現象を示すと結論づけることができよう。

関係性の初期分化現象を示した、Berg (1984)、Hays (1984, 1985)、中村 (1989) などの研究は、将来の関係の分化が“初期”になされるとしているだけで、その時期を特定するものではなかった。つまり、関係性の初期分化現象といっても、関係が第一印象の段階で決まってしまうのか、相互作用を行った結果決まるのか、あるいはその場合どの程度の相互作用が必要なのかといったことは明らかではなく、関係性の初期分化現象の定義自体が極めてあいまいなものであったことは否定できない。というのも、Berg などの先行研究は、対人関係の親密化過程においては関係形成の初期が極めて重要であると主張しているにもかかわらず、初期に相当すると考えられる時期になされた測定は1回限りであった。そのため、いずれの研究においても1回目の調査時点で関係が分化していることは示されたが、それまでの数週間でいつ分化が生起してくるのか、そして分化が安定するのはいつかといったことは明らかにすることができなかった。本研究においては、出会って1週間後、2週間後、4週間後と対人関係形成の初期と考えられる時期に集中して測定を行い、よりダイナミックに対人関係の親密化過程に迫ろうとした。その結果、出会って1週間の時点では将来の関係の分化は不安定であったが、2週間の時点では極めて安定していることが明らかとなったわけである。したがって、本研究に関する限り、これまであいまいであった関係性の初期分化現象の定義を以下のように定義しな

すことができる。すなわち、関係性の初期分化現象とは、ある対人関係の親密化可能性が会って2週間という極めて短期間のうちに決定される現象で、それはその2週間の対人的相互作用の様態によって決定されるのであるとすることができる。以上のようなことから、本研究で得られた知見は極めて重要な知見であると考えられる。

次に、これまでに蓄えられた社会心理学の知見を参考にして、対人関係の親密化過程が関係性の初期分化現象を示す理由について考察することにする。

人は新たに他者と出会うと、その他者との関係の親密化可能性に関してある意思決定をする。ただし、その意思決定は意識されていないかもしれない (Berg & Clark, 1986)。そして、ひとたび意思決定されると、その決定に沿って関係が形成されていくようにあらゆるプロセスが機能していくと考えられる。これを間接的にはあるが裏付けるような実証的知見も報告されている。例えば、Zadny & Gerard (1974) は、人は他者に関して持っている期待と一致した他者の行動を覚えている傾向がある、また、Snyder & Swann (1978)、Swann & Read (1981) は、人は他者に関して持っている期待と一致した情報を選択的に探し求めている、さらには、Snyder, Tanke, & Berscheid (1977) は、期待と一致した行動を他者から引き出しているということを見いだした。こうした予言の自己実現が関係性の初期分化現象を生起させているひとつの原因であると考えられる。今後は、以上のような関係性の初期分化現象のメカニズムをダイレクトに検討する研究が必要であろうと思われる。

2. 対人関係の親密化のための行動、及びその性差

Table 3, Table 4 から以下のことが明らかとなった。将来関係が親密になるか否かは出会って2週間で決定されるのであるが、女性の場合は出会ってから2週間の相互作用が、男性の場合は出会ってから1から2週目の1週間の相互作用が重要であった。また、性別によって、対人関係の親密化に影響を及ぼす行動領域が異なることも示された。すなわち、女性の場合、自分自身に関する情報を開示したり、話し合ったりする Communication 行動の影響力は若干低い、4つのすべての行動領域が重要であった。これに対して、男性の場合、一緒に活動や経験を共有する Companionship 行動が特に重要であり、情緒的絆を表わす Affection 行動は影響力を持っていないことが明らかとなった。

まず、なぜ女性の場合は出会ってから2週間の相互作用が大切で、男性の場合は出会ってから1から2週目の1週間が重要となるのであろうか。前述したように、女性

と考えられる。したがって、出会った最初の頃から対象人物に対して親密さを感じ、出会ってから2週間が重要という結果になったと考えられる。これに対して、男性には、親密になることを抑制する社会的規範が存在する (Clark & Reis, 1988) ことが知られている。そのため、出会ってから最初の1週間は対象人物に対する親密さの表出が抑制され、出会ってから1から2週目の1週間が重要という結果になったのであろうと考えることができる。

次に、性別によって、対人関係の親密化に影響を及ぼす行動領域が異なるという結果に関して考察する。従来より、女性は親友と個人的な問題や家族、友人について互いに話すことが多く、男性は一緒に活動することが多いという結果が得られている (Caldwell & Peplau, 1982; 和田, 1993 など)。また、Hays (1985) は、男性同士の友人関係は活動を共有することから進展し、女性同士の友人関係は自分自身についての言語的コミュニケーションがより重要な役割を果たすことを明らかにしている。本研究で得られた結果は、男性に関しては従来の結果と一致している。しかし、女性に関しては、本研究では4つの行動領域すべてが関係親密度と有意な相関をもっており、相対的に Communication 得点との相関が最も低くなっている。これは従来の結果とは異なっている。おそらく、本研究の調査が出会って1週間、2週間という極めて初期に実施されたためであらうと思われる。今後のさらなる検討が必要であらう。

最後に、これまで取り上げなかった研究上の問題点と今後の課題について述べよう。まず第1に、本研究では、「大学入学前はお互いに見ず知らずで、入学後知り合い、時間が経つにつれて、良い友人になりそうだと思う同性の人物を頭に思い浮かべてください」という指示を行っている。そのため、全般的に好意的な人物を想起させることとなった。すなわち、表面的関係群といっても必ずしも対象人物に対して非好意的というわけではなく、相対的に非好意的な対象人物ということである。にもかかわらず、好意、非好意の分化がみられたことは事実であり、今後、対象人物との親密性のレンジを広げれば、さらにより明確な分化がみられる可能性がある。対象人物の想起のさせ方を工夫する必要がある。

第2に、本研究は大学生を対象としている。一般に大学生は容易に関係を形成、解消することが可能であると考えられる。結果の一般化のためには大学生以外の集団を対象として検討していかねばならないであろう。また、本研究の結果は同性の友人関係に限定されたものであり、今後は異性関係も対象に検討していかねばならない

であらう。

第3に、本研究では約2カ月半後の関係の予測にとどまっている。今後は長期的な関係の予測も可能であるか検討していく必要がある。

最後に、縦断的研究においては常に問題となることであるが、測定を反復することからさまざまな問題点が生起すると考えられる。例えば、再検査効果、回帰効果、さらには単純な前回評定値の記憶に基づく評定の可能性などが考えられる。結果の一般化のためには、本研究で得られた結果がどれだけ測定に依存したものであるのかを検証する必要があるだろう。

引用文献

- Altman, I., & Haythorn, W. W. 1965 Interpersonal exchange in isolation. *Sociometry*, **23**, 411-426.
- Altman, I. & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Ando, K. 1978 Self-disclosure in the acquaintance process: Effects of affiliative tendency and sensitivity to rejection. *Japanese Psychological Research*, **20**, 194-199.
- Berg, J. H. 1984 The development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 346-356.
- Berg, J. H. & Clark, M. S. 1986 Differences in social exchange between intimate and other relationships: gradually evolving or quickly apparent? In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag. Pp. 101-128.
- Berg, J. H. & McQuinn, R. D. 1986 Attraction and exchange in continuing and noncontinuing dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 942-952.
- Caldwell, M. A. & Peplau, L. A. 1982 Sex differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, **8**, 721-732.
- Clark, M. S. & Reis, H. T. 1988 Interpersonal processes in close relationships. *Annual Review of Psychology*, **39**, 609-672.
- Hays, R. B. 1984 The development and maintenance of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, **1**, 75-97.
- Hays, R. B. 1985 A longitudinal study of friendship de-

- velopment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 909-924.
- 廣岡秀一 1985 社会的状況の認知に関する多次元的研究
実験社会心理学研究, **25**, 17-25.
- Keiser, G. J. & Altman, I. 1976 Relationship of non-verbal behavior to the social penetration process. *Human Communication Research*, **2**, 147-161.
- Mendelsohn, G. A. & Griswold, B. B. 1967 Anxiety and repression as predictors of the use of incidental cues in problem solving. *Journal of Personality and Social Psychology*, **6**, 353-359.
- Morton, T. L. 1978 Intimacy and reciprocity of exchange: A comparison of spouses and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 72-81.
- 中村雅彦 1989 大学生の友人関係の発展過程に関する研究 (1) —関係性の初期差異化現象に関する検討— 日本グループ・ダイナミクス学会第 37 回大会発表論文集, 65-66.
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, **31**, 132-146.
- Schachter, S. 1959 *The Psychology of affiliation*. Stanford University Press.
- Snyder, N. & Swann, W. B. 1978 Hypothesis testing processes in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 1202-1212.
- Snyder, M., Tanke, E. D., & Berscheid, E. 1977 Social perception and interpersonal behavior: On the self-fulfilling nature of social stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 656-666.
- Swann, W. B. & Read, S. H. 1981 Self-verification processes: How we sustain our self-conceptions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **17**, 351-372.
- Taylor, D. A. 1968 Some aspects of the development of interpersonal relationships: Social Penetration Processes. *Journal of Social Psychology*, **75**, 79-90.
- Taylor, D. A. & Altman, I. 1975 Self-disclosure as a function of reward-cost outcomes. *Sociometry*, **38**, 18-31.
- Taylor, D. A., Altman, I., & Sorrentino, R. 1969 Interpersonal exchange as a function of rewards and costs and situational factors: Expectancy confirmation-disconfirmation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **5**, 324-339.
- Templer, D. I., Ruff, C. F. & Franks, C. M. 1971 Death anxiety: Age, sex, and parental resemblance in diverse populations. *Developmental Psychology*, **4**, 108.
- 和田 実 1993 同性友人関係：その性および性別役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67-75.
- 和田 実・廣岡秀一・林 文俊 1986 大学生の交友関係の進展に関する研究 (1) 日本社会心理学会第 27 回・日本グループ・ダイナミクス学会第 34 回合同大会発表論文集, 73-74.
- Zadney, J. & Gerard, H. B. 1974 Attributed intentions of informational selectivity. *Journal of Experimental Social Psychology*, **10**, 34-52.

(1993年11月22日受稿)
(1994年 4月26日受理)